

## 第6章

# テンボ語の声調 —そのパターンと文法的機能—

梶 茂樹

### 1. 始めに

#### 1.1 テンボ語

テンボ語 (Échitémbo) はコンゴ民主共和国 (旧ザイール共和国) 東部に話されるバンツ系<sup>1</sup>の1言語である<sup>1</sup>。筆者は1976年から1990年まで15年間にわたって現地調査した。当時は、テンボ族の住む地域の役場の住民台帳から、テンボ族の総数を4万人から5万人と推定したが(梶 1978、赤阪 1978<sup>2</sup>)、Eberhard et al. (2019) によると、テンボ語話者は150,000人となっている。Eberhard et al. (2019) がどのような根拠で150,000という数字を出したかはわからない。この違いは、30年の間に人口が3倍に増えたということなのか、あるいは、梶 (1978)、赤阪 (1978) か、Eberhard et al. (2019) の推定が間違っていたからなのか。ただ、数10万人という人口を擁する周辺のシ族やレガ族に比べると少数であることには間違いない。

テンボ社会は、近くのルワンダやアンコーレのような王国ではなく、伝統的に、緩やかな首長制社会を形成してきた。方言は、概略、中央部・東部のムブグ方言、南部のプロホ方言、西部のブニャキリ方言、北部のウファマンヅ方言に分かれる。しかしながら方言差は小さい。一般的に言って、南部のプロホ方言にはその南に話されるシ語的特徴が現れるし、西部のブニャキリ方言には

---

<sup>1</sup> テンボ語についてはデータが少なく、南のシ語 (Shi) と混同されたり、また北のフンデ語 (Hunde) の一部と見られたりと混同がある。この間の事情については梶 (1984) 参照。Maho (2009) がテンボ語の分類番号を JD531 Tembo としているのも、この言語を JD53 Shi と混同しているためである。

<sup>2</sup> 赤阪 (1978) は少し多めに見積もり、5万人から6万人と推定している。

西のレガ語的特徴が現れる。また北部のウファマンズー方言には、その北に話されるフンデ語的特徴が現れるし、さらに、中央部・東部のムブグ方言には、その東のハブ語的特徴が現れる。言語はこういう風に緩やかに変異していく。私見によれば、これは多くのアフリカ地域に共通する特徴である<sup>3</sup>。しかしながら、声調はテンボ語のどの方言でも同じで、この点、言語の境界を示す有益なメルクマールとなっている。本稿は主としてブニャキリ方言の例を示す。

テンボ語の声調については特徴的なことが2つある。1つは、声調の調値がバンツー祖語や周辺言語と比べて逆転していることである（梶 1994, Kaji 1996）。もう1つは、名詞類の声調のパターンが単語を構成するモーラ数が増えるに従って等比級数的に増えていく無制限タイプであることである（梶 1978, 2001b）。さらに、声調実現の単位が音節ではなくモーラである点、また単独形の声調が基本となるというのもテンボ語の特徴である。

本稿の考察の主たる対象は、テンボ語の共時的声調パターンである。声調の通時的特性は、説明の都合上触れることはあっても、本稿の対象ではない<sup>4</sup>。また声調の文法的機能の説明も概略にとどめた。

## 1.2 声調

テンボ語の基本声調は他の多くのアフリカ諸語同様、高平板調 H (high) と低平板調 L (low) の2つである。尤も、音声的には H と L の組み合わせにより (1a) のように下降調 F (falling) と (1b) のように上昇調 R (rising) が生じる。

- (1) a. /é-mú-ita/ → émwíta<sup>5</sup> [ˈ\_ \_] 動物の通り道 sg.  
 b. /kú-ta-án-á/ → kútǎná<sup>6</sup> [ˈ\_ -] 忠告しない

<sup>3</sup> これは他の言語から見れば、例えば、フンデ語の南部方言にはテンボ語的特徴が現れるということになる。

<sup>4</sup> これについては梶 (1994) および Kaji (1996) 参照。

<sup>5</sup> 4節で述べるが、/ui/ の連続は [wi] と1モーラ化する。なお以下、表記は IPA の簡略表記とする。

<sup>6</sup> /aa/ の母音連続も1モーラ化し [a] となる。

なお注意すべきは、テンボ語では語頭の鼻音 1 個からなる音節（正確にはモーラ）にも声調は付くということである。(2a) (2b) の例では H、(2c) (2d) では L である<sup>7</sup>。

- (2) a. *ńgoko* ニワトリ sg.,pl.  
 b. *mbikó* 蓄え sg.,pl.  
 c. *ńgúmbú* ヒョウタンのコップ sg.,pl.  
 d. *mbála* 森 sg.,pl.

声調の音声的変化としてテンボ語に *downdrift* と呼ばれる現象がある。これは、L のあとの H は少し低く実現されるというものである。(3) の例参照。L の前に H があってもなくても同じである。*downstep* は生じない。

- (3) a. *émúlumé* [ ˈ ˌ \_ - ] 男 sg.  
 b. *kútaŋgírísá* [ ˌ \_ - - - ] 始める  
 c. *mufújńkó* [ \_ - - - ] 蓋 sg.

## 2. 名詞類の形態論的構造

テンボ語（そして一般にバンツー系諸語）の単語は、接頭辞を取るか取らないかによって大きく 2 つに分類される。接頭辞を取らないものは不変化詞 (*invariable*) で、数は多くない。接頭辞を取るものは、さらにその取る接頭辞の種類によって、名詞類 (*nominal*) 接頭辞を取る名詞類、代名詞類 (*pronominal*) 接頭辞を取る代名詞類、数詞類 (*enumerative*) 接頭辞を取る数詞類、そして動詞の主語接頭辞 (*subject prefix*) を取る動詞類の 4 種類に分けられる。本稿で主として考察するのは名詞類である。名詞類というのは主として

<sup>7</sup> 例えば、標準スワヒリ語でも *ńzi* 「蠅 sg.,pl.」のように、語頭の鼻音にもアクセントが来ることがある。しかし、これは単語が 2 音節という音声的理由からであって、単語が 3 音節以上だとアクセントが来ることはない（コンゴ・スワヒリ語では単語が 2 音節であってもこの鼻音にアクセントが来るのを防ぐため、鼻音の前に母音を挿入し「蠅 sg.,pl.」は *ínzi* となる）。テンボ語で語頭の鼻音に H が来るのは、単語の長さとは関係ない音韻的理由からである。

名詞であるが、伝統文法でいう形容詞の多くを含む。例えば、品質形容詞の -bújá「良い」や数形容詞の -ʔuma<sup>8</sup>「1 つの」は、取る接頭辞が名詞と同じものであり名詞類に入る。

名詞類の声調パターンを考察するにあたっては、単語の形態論的構造を知ることが重要なことである。名詞は形態論的構造が単純なものが多いが、動詞から派生されている場合は、動詞の声調も考慮に入れなければならない。またバンツー系言語では、名詞類接頭辞の声調はバンツー祖語で L であったのを引き継ぎ、文法的に L と決まっている言語も多いので、接頭辞の声調にも注意が必要である。本節では、まず名詞類の基本的な形態論的構造を示し、動詞からの派生名詞は6節で述べる。

テンボ語の名詞類は、(4a) のような形態論的構造をしている。

(4) a. Aug-NPr-Stem<sup>9</sup>

b. é múkasi 女性 sg.

é-mú-kasi

Aug-NPr1<sup>10</sup>-woman

c. múkasi múuma 1人の女性、ある女性 sg.

mú-kasi mú-ʔuma

NPr1-woman NPr1-one

Aug というのは、一種の冠詞で、名詞が単独で発音されたり、文の主語や目的語として用いられる場合は、これを伴って現れる。しかし名詞が他動詞の否

<sup>8</sup> ʔ は4節で述べる2つの母音連続が1モーラ化することを防ぐデバイスである。かつての子音の痕跡であるが、そこに声門閉鎖音が現れるという意味ではない。

<sup>9</sup> 本稿で用いる略語は以下のようである。Aug: augment (増補辞)、NPr: nominal prefix (名詞類接頭辞)、PPr: pronominal prefix (代名詞類接頭辞)、SPr: subject prefix (主語接頭辞)、Ext: formal extension (形式的拡大辞)、Appl: applicative (適用)、Pass: passive (受身)、Tr: transitive (他動)、RevTr: reverse transitive (逆他動)、PosTr: positional transitive (位置的他動)、Prefin: prefinal (前語尾)、FV: final vowel (語尾母音)、Perf: perfective (完了形)、PresProg: present progressive (現在進行形)、TM: tense marker (時制標識)、SubRel: subject relative (主語関係節)、sg.: singular (単数形)、pl.: plural (複数形)、TBU: tone bearing unit (声調を担う単位)、TRU: tone realization unit (声調実現単位)、PB: Proto-Bantu (バンツー祖語)。

<sup>10</sup> NPr のあとの数字は、(5) で示す名詞のクラス番号である。

定の目的語になった場合や、数詞を伴った場合など、いくつかの統語的環境では現れない。その形態は、本稿で扱うテンボ語ブニャキリ方言などでは、名詞のクラスに関係なく常に *é-* であるが、ムブグ方言などでは、名詞接頭辞に含まれる母音（母音がない場合は子音）によって形を変える。すなわち、名詞接頭辞に含まれる母音が /i/ あるいは名詞接頭辞がクラス 9 のように N-<sup>11</sup> の場合は *é-*、名詞接頭辞に含まれる母音が /a/ の場合は *á-*、そして /u/ なら *ó-* である。どの方言においてもその声調は常に H である。また単語の声調は、Aug があるなしにかかわらず NPr-Stem の部分は一定である（従って、以下の例では Aug は省く）。

名詞接頭辞というのは名詞類を構成する単語の必須要素で、(5) のように、多くは CV- 構造をしている。クラス 1 とクラス 2 にはそれぞれサブクラス 1a とサブクラス 2a とがある。1a はクラス接頭辞が Ø- (ゼロ) である。クラス 5 には li- と e- の 2 種類の接頭辞があるが、li- は語幹が母音で始まる場合、そして e- は語幹が子音で始まる場合に用いられる。クラス 9/10 の N- としたものは、かぶせ音素的表記で、語幹が何で始まるかによって決まる。つまり、子音の場合は同器官的鼻音に、そして母音で始まる場合は j- となる。またクラス 9、クラス 10 とも接頭辞が Ø- となるものもある。これらは語幹が無声子音で始まる場合や借用語の場合である。さらに、クラス 10 には接頭辞が ji- のものがある。これはクラス 9 とクラス 10 が基本的に同じ形態をしているので、区別をしようという試みだと思われる。なお、名詞は、クラス 1 とクラス 2、クラス 1a とクラス 2a、クラス 3 とクラス 4、クラス 5 とクラス 6 のように 2 つがペアとなり、それぞれ名詞の単数形と複数形を表す。ただしクラス 9 とクラス 10 のように単複同形のものや、単数形だけしか用いられないもの、また複数形だけしか用いられないものもある。

なおテンボ語の名詞接頭辞の声調は、多くの場合 H である。これはテンボ語の声調がバンツー祖語から逆転していることと関係がある（バンツー祖語では L）。ただし現在のテンボ語では H のもののみならず L のものもある。しかしながら 2a の *bá-* と 15 の *kú-*、および 16、17、18、20 の場所クラスの接

<sup>11</sup> これは後で述べる、同器官的鼻音のかぶせ音素的表記である。

頭辞は必ず H であるので H でマークしている。

(5) 名詞類の接頭辞

1. mu-      1a. Ø- (ゼロ)
2. ba-      2a bá-
3. mu-
4. mi-
5. li-, e-
6. ma-
7. ŋi-
8. bi-
9. N-, Ø- (ゼロ)
10. N-, Ø- (ゼロ), ni-
11. lu-
12. ka-
13. t<sup>s</sup>u-
14. bu-
15. kú-
16. á-
17. kú-
18. mú-
19. hi-<sup>12</sup>
20. é-<sup>13</sup>

<sup>12</sup> このクラスは縮小クラスである。クラス 12 よりさらに小さいものを表す。固有の名詞はなく、派生名詞のみである。

<sup>13</sup> このクラスは、クラス 16、17、18 に続く第 4 の場所クラスである。固有の名詞はなく、指示詞など限られた語類でしか用いられない。

### 3. 名詞類の声調パターン<sup>14</sup>

母音の長短の問題と、音節かモーラかという問題は、それぞれ4節と5節で述べるとして、本節では、まず名詞類の声調のパターンを単語のモーラ長ごとに示す。

#### (6) 1モーラ語のパターン

H 例なし

L (é)fi 9/10<sup>15</sup> 魚

1モーラ語の名詞類は極めて稀である。名詞類は通常、接頭辞と語幹から成り、それぞれが1モーラであるからである。(é)fi 9/10「魚」という単語は例外的なものである。この語の é- の部分は接頭辞のように見えるが、本来は Aug で接頭辞は Ø- である。単語が短いせいで多くの場合 Aug の é- を付けたまままで用いられる。ただ数形容詞の「1つの」が付けば、(7)のように fi だけが現れる。

#### (7) fi ńguma [fínguma] 一匹の魚

fi ń-guma

fish NPR9-one

1モーラ語で H である名詞類語は存在しない。「そして、共に」を意味する ná という単語はあるが、これは不変化語(小辞)であって名詞類ではない。

<sup>14</sup> 以下の例に出てくる単語は、Kaji (1986) と梶 (2001b) から取ったものである。

<sup>15</sup> 名詞のあとの数字は (5) で述べた名詞のクラス番号である。これを付けてあるのは、単語のどの部分が接頭辞であるのかをはっきりさせるためである。9/10 のように数字を / で区切ってあるのは、単数形が / の前、そして複数形が / の後のクラスで用いられる単語であることを示す。掲げられている単語は単数形のものである。なお、この 9/10 の場合は単複同形である。

## (8) 2 モーラ語のパターン

HH	múnd'ú 1/2	人間	lút'wé 11/10	屋根
HL	múfí 3/4	木	búja 14/6	結婚
LH	lubá 11/10	刀の鞘	mujú 3/4	塩
LL	muka 3/4	空気	mafu 6	酒

接頭辞が1モーラで語幹が1モーラの2モーラ語では、(8)のように、H と L の組み合わせでできる4つのパターンのすべてが現れる。テンボ語の名詞接頭辞の声調は基本的に H なのに、なぜ L で現れるものがあるかということについては2つの理由がある。1つは、名詞接頭辞の声調が L である周辺言語からの借用である<sup>16</sup>。

もう1つは、より重要であるが、テンボ語の歴史的変化によるものである。これは、(8)の単語を、(9)のように、接頭辞と語幹で区切ってみればわかる。例えばテンボ語の mu-jú 3/4「塩」の語幹は、(11a)のバンツー祖語や(10b)のウガンダのチガ語のように、本来母音 \*u (バンツー祖語では \*ju となっている) で始まっていた。それが、テンボ語では(10c)で示すように、声調が逆転し、かつ \*j の脱落によって生じる母音連続 ú-u が1モーラ化する過程で [ú:] の F が L となり、かつこの1モーラ化によって生じた短母音 [u] が、クラス3の接頭辞が mu- であるため、接頭辞の母音であると再構造化されたのである。mafu 6「酒」なども同様で、mafu 6「酒」は(11)のような派生が考えられる。やはり2連続母音の1モーラ化により、母音の再構造化が起こっている。2連続母音の1モーラ化が起こらなかった(起こらない)チガ語では、(10b)のように「塩」はmú:puであり、長母音 [ú:] によりそこに2つの母音があることは明らかであり、語幹は語源通り -úpu と分析できる。

<sup>16</sup> 例えば(13)に出てくる mulónggi「鳥 sg.」は、テンボ語の北西に話されるニャンガ語の mulóngce「鳥 sg.」の借用ではないかと思われる。

(9) 2モーラ語のパターン (名詞接頭辞と語幹を分けたもの)

HH	mú-nd <sup>2</sup> ú 1/2	人間	lú-t <sup>2</sup> wé 11/10	屋根
HL	mú-ŋĩ 3/4	木	bú-ja 14/6	結婚
LH	mu-nú 3/4	塩	lu-bá 11/10	刀の鞘
LL	mu-ka 3/4	空気	ma-fu 6	酒

(10) a. PB: \*-jóno<sup>17</sup> ‘salt’

b. Ciga: mu-únu [mû:nu]

c. Tembo: \*mu-jóno > mú-junú > mú-ujnú > mû:jnú > mujú > mu-nú

(11) a. PB: \*-jábú ‘beer’

b. Tembo: \*ma-jábú > má-jabu > má-abu > mâ:fu > mafu > ma-fu

しかしながら (12) のように、F の生じるものも多少ある。これらは、(10) (11) 同様、語幹初頭に \*j 以外の何らかの子音 (多くの場合 \*p) があり、その子音がやはり脱落したのであるが、脱落のタイミングが \*j の場合とは異なり (\*jより後)、子音脱落に続く母音連続の1モーラ化の際、F が L とならなかったものである。

(12) FH	mwâŋgé 3/4	若いバナナの木	mwâní 1/2	気前のいい人
FL	mwâfu 1/2	ハヴ族の人間	bwâna 14	不運

3モーラ語も (13) のように H と L の組み合わせ可能な8つのパターンすべてが現れる。それに加えて、(14) のように F の生じるものもあるが、これらは (12) 同様、歴史的事情により、F が L とならなかったものと考えられる。なお (13) (14) では名詞接頭辞と語幹の間を区切っていないが、区切りは、声調パターンの HL 表記と (5) の名詞接頭辞表を見れば容易にわかるので、重複を避け表示していないものである。

<sup>17</sup> バンツー祖語で \*j で表記される子音の音価は、正確には分っていない。[j]、[dʒ]、[z] などの可能性がある (ゼロの場合もありか)。

## (13) 3モーラ語のパターン

HHH	múlúŋgú 3/4	列状集落
	lúsfá 11/10	池
HHL	ŋíjála 7/8	羽根
	lúhúŋu 11/10	瓜
HLL	múkasi 1/2	女、妻
	kásimba 12/13	虫
HLH	bútúfú 14/6	夜
	káfundó 12/13	結び目
LHH	ŋísjájá 7/8	赤色
	lufúfú 11	灰
LHL	mulóŋgi 3/4	鳥
	luŋjímba 11/10	服
LLH	ŋisuŋgú 7/8	外国の物
	musuŋgú 1/2	外国人（特に白人）
LLL	lukuta 11/10	壁、塀
	mupuŋge 3/4	米

(14) HFL	mút*wáli 1/2	王の弟
	ŋít*wèt*wé <sup>18</sup> 7/8	動物の頭
FHH	lwêkúló 11/10	朝食
	mwêrésí 1/2	すぐ下のキョーダイ
FLH	ŋûmbukú 7/8	ゴシキ鳥の一種
FLL	mwálala 1/2	喧嘩を吹っ掛ける人
	mwêlulwa 1/2	再婚した未亡人
LFL	muŋgôndo 3/4	大腸

4モーラ語も (15) のように、H と L の組み合わせ可能な16ターンがすべて現れる。それに加えて、(16) のように F の生じるものもあるが、これらは (12)

<sup>18</sup> この語には ŋít\*wet\*wé という発音もある。ét\*wé 7/8 「頭」から派生されている。

(14) と同様に考えられるものである。

(15) 4モーラ語のパターン

HHHH	múbúlúǵí 1/2	喫煙者
	lúréngéró 11/10	夕食
HHHL	bákáǵóte <sup>19</sup> 2a	堅いもの
HHLH	bút'úkúlá <sup>20</sup> 14	赤色
HHLL	ǵíkóroko 7/8	重い受刑者
	músúkire 3/4	編み方
HLHH	mútabáná 1/2	青年
	káhumíró 12/13	草葺の丸型の家
HLHL	kátandáli 12/13	岩盤
	ǵǐbukíli 7/8	キャッサバの一種
HLLH	ǵítoboré 7/8	穴
	múkalangé 1/2	いたずらっ子
HLLL	kábo1osa 12/13	砂ずり
	bútakala 14/6	茄子の木
LHHH	mufúǵíkó 3/4	蓋
	ǵítámísí 7/8	バナナの木の芯
LHHL	bunúnúsa 14/6	バナナの花
	kasákára 12/13	手さげ籠
LHLH	kahóloré 12/13	緑鳩
	maíngané 6	交換
LHLL	mundókolo 3/4	葦の若芽

<sup>19</sup> 単数形は NPr が Ø- の káǵóte 1a である。nábúlóo 1a 「プロホクランの女性メンバー sg.」という語もあるが、この単語の最初の ná- は女性を指す接頭辞ではあるが、名詞類接頭辞ではない。この複数形は bánábúlóo 2a となるので 5 モーラ語に分類すべきである。

<sup>20</sup> このパターンには nábáahá 1a 「双子の母親 sg.」という語もあるが、この単語も注 19 の nábúlóo 1a 「プロホクランの女性メンバー」同様、女性を示す接頭辞 ná- を含むが、これは名詞類接頭辞ではない。この語の複数形は bánábáahá 2a となるので 5 モーラ語に分類すべきである。

	katéřana 12/13	中傷
LLHH	mulaísá 1/2	生活困窮者
	mutarúbú 3/4	道路
LLHL	řĩřibábu 7/8	シャツ
	katetéřa 12/13	話のくどい人
LLLH	mukungulí 3/4	カマキリ
	mandarakwá 6	プランテン・バナナのジュース
LLLL	řĩřibambura 7/8	火傷の跡
	kasomboro 12/13	サイチョウの一種
(16) FHHH	mûbáísó 3/4	脅迫
	mwâmááló 3/4	呼びかけ
FHHL	řĩřombóólo 7/8	虫の一種
FLLL	mjûbakire 4	建築
	mûmvirisa 1/2	聞き耳を立てる人
LFLH	kandžêřeré 12/13	動物の脚

5モーラ語となると、単語の数も減ってきて、H と L の組み合わせで生じる32のパターンすべてが実現されるわけではない。例には語幹の重複形が多く現れる。また少数であるが、(18) のように F の生じるものもある。

(17) 5モーラ語のパターン

HHHHH	múbúánánó 3/4	出会い
	lúhúbálíró 11/10	膀胱
HHHHL	例なし	
HHHLH	例なし	
HHLLL	řĩřnábúuma 7	兄弟であること
HHLHH	múáiái 3/4	酸っぱさ
	múbénzibénzí 1/2	頼病患者
HHLHL	búkóřekóře 14	乾期

	mútókotóko 1/2	喧嘩を吹きかける人
HLLLH	例なし	
HLLLL	múfúlalindži 3/4	花の一種
	búlángalire 14	期待
HLHHH	lúholóótó 1 1/10	吐き気
	músisíkánó 3/4	心の迷い
HLHHL	búhohómóli 14	ニワトリがつついたあと
	ékalááta 5/6	サイチョウの一種
HLHLH	múfulúfulú 3/4	木の一種
	búkombókombó 14	食事の残り物
HLHLL	mújámujá 9/10	熟れた果実の甘味
HLLHH	例なし	
HLLHL	ígumunjúmu 9/10	タロイモ
	kápuruséke 12/13	価値のない人間
HLLLH	例なし	
HLLLL	lútaŋgulira 11/10	的
	múhambalire 3/4	話し方
LHHHH	mumáŋgámáŋgá 3/4	太陽鳥の一種
	ǰibíǰibí 7/8	カッコウの一種
LHHHL	munjúmánjúma <sup>21</sup> 1/2	背むし
	ǰífútéǰúte 7	後ずさり
LHHLH	ŋgórómólí 9/10	ライオン
LHLLL	例なし	
LHLHH	maháŋgajísá 6	十字路
LHLHL	ŋgólóngólo 9/10	タイヤ
LHLLH	例なし	
LHLLL	例なし	
LLHHH	ǰiberékésá 7/8	破片

<sup>21</sup> múnjúmánjúma という発音もある。

LLHHL	lujapnáisa 11	霧雨
	bubiǰóǰo 14	秘密
LLHLH	maǰímbirá 6	毛虫の一種
	lusimbósimbó 11	霧
LLHLL	例なし	
LLLHH	例なし	
LLLHL	mukokolíko 3/4	蟹の缺
	kamuǰengére 12/13	豚
LLLLH	ǰisomerano 7/8	驚異
LLLLL	mukurukuru 3/4	軒下
	esambasamba 5	白人風にすること
(18) HHLFL	bánámugôndo <sup>22</sup> 2a	大腸
LFLLL	ngândabusi 9/10	雄羊

6モーラ語では理論的に64のパターンが可能であるが、現れるのは (19) で掲げたもののみである。F の生じるものはない。

(19) 6モーラ語のパターン

HHHHHH	<sup>23</sup> 例なし	
HHHHHL	kásírábúlóngo 12/13	踝
HHHLHL	bánádóǰondóǰo <sup>24</sup> 2a	カッコウの一種
HHLLHL	bánámbiombó <sup>25</sup> 2a	キャッサバの一種
	bánámusenzéli <sup>26</sup> 2a	トンボ
HHLLLL	búsínderesera 14	最終
HLHHHH	ńderékéréró 9/10	祭壇

<sup>22</sup> 単数形は NPr が Ø- の námugôndo 1a である。

<sup>23</sup> mógólóbérá 3/4 「穴」という語がある。この単語は本来 6 モーラ語 mú-óngólóbérá であるが、/mu-ol/ が [mo] を生じ、全体として 6 モーラとならず 5 モーラである。

<sup>24</sup> 単数形は NPr が Ø- の nádóǰondóǰo 1a である。

<sup>25</sup> 単数形は NPr が Ø- の námbiombó 1a である。

<sup>26</sup> 単数形は NPr が Ø- の námusenzéli 1a である。

HLHLLH	ńdaákajirwá 9/10	人が弁護をしてくれない人
HLLHHH	múfítondóbóló 3	人に自分の出自を明かすこと
LHLHLL	t'útonet'útone 13	斑点

テンボ語の名詞類の最大の長さのものは7モーラ語である<sup>27</sup>。現れるのは(20)の3パターンのみで、すべて語幹の重複語である。

(20) 7モーラ語のパターン

HHHLHLH	bánámásiósió <sup>28</sup> 2a	ヒタキ
LHHHHHH	ndǰíbilíndǰíbilí 9/10	太鼓の一種
LHHLHHL	ndólóngondólóngo 9/10	団子状のもの

#### 4. 母音の長短について

テンボ語には母音の長短の区別はない。かつての母音の長短の区別は失われ1モーラ化している。現在も2つの母音が続いた場合、2つの母音は1モーラ化する。

(21) a. mwaná 子供 sg.	b. baná 子供 pl.
mu-aná	ba-aná
NPr1-child	NPr2-child
(22) a. kwítá 殺す	b. kútetá 殺さない
kú-it-á	kú-ta-it-á
NPr15-kill-FV	NPr15-not-kill-FV

(21) は名詞「子供」の単数形 *mwaná* と複数形 *baná* を示したものである。いずれも2音節2モーラ語である。単数形では /u-a/ の連続において /u/ の半母音化は起こるが後続母音 /a/ の代償延長は起こらず全体として [wa] とな

<sup>27</sup> 本稿では *káúnga-lúkoba* 12/13 「山羊の直腸」のような複合語は対象としない。

<sup>28</sup> 単数形は NPr が Ø- の *námásiósió 1a* である。

る。複数形では /a-a/ の連続が合体し [a] となる。いずれも 1 モーラである。(22) は動詞「殺す」の不定形 kwítá が、否定形「殺さない」ではどうなるかを示したものである。kwítá では /u-i/ の連続が、やはり /u/ の半母音化による後続母音の代償延長が起こらず、[wi] と 1 モーラ化する。否定形では /a-i/ の連続が合体 1 モーラ化し [e] となる。タンザニアのハヤ語やウガンダのチガ語などでは、母音の連続が、高母音の半母音化による後続母音の代償延長など幾つかの音声的变化はあるにしても、あくまでも 2 モーラのまま留まる (梶 2001c)。そういった言語は多いが、テンボ語ではそうではないのである。

しかしながら、一見、母音の長短の区別があるように見える場合がある。

- |  |  |
|--|--|
| (23) a. ǰúfú [ǰúfú] 胃 sg.<br>ǰǐ-úfú<br>NPr7-stomach        | b. ǰíúfú [ǰí:úfú] 樹皮 sg.<br>ǰǐ-ǰíúfú<br>NPr7-bark                  |
| (24) a. kwáná [kwáná] 忠告する<br>kú-án-á<br>NPr15-advise-FV   | b. kútáná [kútáná] 忠告しない<br>kú-ta-án-á<br>NPr15-not-advise-FV      |
| (25) a. kúáná [kwá:ná] 物語る<br>kú-ǰán-á<br>NPr15-narrate-FV | b. kútaáná [kútá:ná] 物語るらない<br>kú-ta-ǰán-á<br>NPr15-not-narrate-FV |
| (26) a. kúítá [kwítá] 通る<br>kú-ǰit-á<br>NPr15-pass-FV      | b. kúitáitá [kúitáitá] 通らない<br>kú-ta-ǰit-á<br>NPr15-not-pass-FV    |

(23a) と (23b) は最小対をなしている。また (24a) と (25a)、そして (22a) と (26a) も最小対である。しかし、それらの区別は母音の長短によるものではない。長母音が現れる (23b) (25a) (25b) (26a) の場合、その長母音は表面的な調整にすぎない。(23b) (25a) (26a) は前の母音が高母音であるため半母音化したもの、そして (25b) は同じ母音であるためである。これは (23a) (24a) (24b) などと同じである。しかし異なっているのは、(23b) (25a) (25b) (26a) で

はそういったプロセスが起こっても2つの母音が1モーラ化しないのである。前の母音が高母音でない場合や同じ母音でない場合は、2つ母音の融合はブロックされるのである。(26)の例がわかりやすい。(26a)では /u-i/ が [wi:] となるが、(26b)では /a-i/ の連続が、融合せずにそのまま [ai] と現れる。もし融合するのなら2モーラのまま留まるにしても、母音は(22b)のように [e] と融合し、[e:] となるべきであるが、そうはならないのである。これは(26)の語根 -it- 「通る」の最初の母音の前に、その前の母音との融合をブロックする何かがあるからと考えられる。本稿では、単語を形態素表記した場合、この2つ母音の融合を防ぐ要素を ? で表す。歴史的な観点からみると、その位置に子音であったのであるが、現在のテンボ語では、極まれな例を除いて失なわれてしまっているのである<sup>29</sup>。なお、単語を形態素表記ではなく普通に書く場合は、ǰíúfú 「樹皮 sg.」(23b)、kúáná 「物語る」(25a)のように元々の母音をそのまま書く。

## 5. TBU について

### 5.1 TBU と TRU について

TBU (tone bearing unit) という用語には混乱がある。「何が声調を担うか」ということと「声調が実現される範囲」とが混同されているためである。以下、この2つの区別について述べ、続いてテンボ語では単語の長さは音節ではなくモーラで数えるということを明らかにする。まず、声調が何によって担われているかという点であるが、(27)を見られたい。

<sup>29</sup> ? がまったくの抽象的な虚構物かと言うとそうでもない。(4c)の -?uma 「1人の」と(7)の -guma 「1匹の」は同じ数形容詞である。(4c)では接頭辞が mu- で、/g/ は母音に挟まれるため脱落しているが、(7)では接頭辞が鼻音であるため、この /n/ と結びつき脱落していないのである。(25a) kúáná [kwá:ná] /kú-?án-á/ 「物語る」でも /g/ は再構成できる。この動詞語根から派生された「物語」という名詞があるが、単数は lúánó [lwá:nó] /lú-?án-ó/ であるが、複数は níánó [ná:nó] /ní-?án-ó/ と ngánó [ngánó] /n-gán-ó/ の2つの形がある。ngánó では、/g/ は前の鼻音と結びつき残っている (ngánó に長母音が生じていないことに注意)。詳しくは(梶 1982)参照。

(27)		単数	複数
a.	1 人称	n-á-sin-a	t <sup>h</sup> u-á-sin-a
	2 人称	u-á-sin-a	mu-á-sin-a
	3 人称	a-á-sin-a	ba-á-sin-a
b.	1 人称	násina	t <sup>h</sup> wásina
	2 人称	wásina	mwásina
	3 人称	ásina	básina
c.	1 人称	ná-si-na	t <sup>h</sup> wá-si-na
	2 人称	wá-si-na	mwá-si-na
	3 人称	á-si-na	bá-si-na

(27) は動詞 *-sin-* 「踊る」の現在進行形（私は踊っている、など）の人称と数による変化を示したものである。(27a) は変化形を形態素分析したもので、それぞれの形の最初の要素 *n-*, *u-*, *a-*, *t<sup>h</sup>u-*, *mu-*, *ba-* は、それぞれ主語人称接頭辞「私」「あなた」「彼(女)」「我々」「あなた方」「彼(女)ら」を表す。次の *-á-* は現在進行の時制標識、*-sin-* は動詞語根「踊る」、そして最後の *-a* は動詞語尾である。ここで注目すべきは、高声調 *H* を担っているのは時制標識の母音 *-á-* であるということである。これを筆者は、時制標識の母音 *-á-* が高声調 *H* を担っているとし、この *á* を TBU (tone bearing unit)「声調を担う単位」と呼ぶ。

(27a) の諸形式は実際は (27b) のように発音される。ここで時制標識 *-á-* はその前の要素である人称接頭辞と合体し 1 音節 1 モーラ化する。(27c) は、各変化形を音節（モーラ）に分けたものである。(27c) の形式はすべて 3 音節 3 モーラから成っている。テンボ語には、4 節で述べたように、母音の長短の区別はなく、かつての母音の長短の区別は失われ 1 モーラ化している。現在も 2 つの母音が重なった場合、(28) のように 2 つの母音は 1 モーラ化する。なお上昇調 *R* は語頭では *R* として実現されず *H* となる (29)。



[kú:lú] 15 「脚」という単語の構成は HHH である *múlúngú* 3/4 「列状集落」や *lúsíbá* 11/10 「池」と何ら変わりがない。ついでながら、*múlúngú* 3/4 「列状集落」のように語中に鼻音複合があっても、その前の母音は長音化しない。タンザニアのハヤ語やウガンダのチガ語など、鼻音複合があると、その前の母音が長母音化（あるいは、全体として2モーラ化）する言語は多くあるが、テンボ語はそうではない。

## 6. 動詞派生名詞

テンボ語の名詞類の声調パターンは、H と L が自由に並ぶ無制限タイプであるが、単語に現れる声調がすべて無秩序に並んでいるわけではない。動詞からの派生名詞は、動詞の声調パターンを踏襲するものも多い。例えば、(31) の *mútámó* 「疲れ」は、動詞語根 *-tám-* 「疲れる」（不定形 *kútámá*）にクラス 3 の名詞類接頭 *mú-* と名詞形成語尾 *-ó* が付いて派生されたものである。名詞形成語尾 *-ó* の声調は H である。(32) の *mútámúkó* 「休憩」は、動詞語根 *-tám-* 「疲れる」に逆意・自動の接尾辞 *-uk-* が付いた *-tám-uk-* 「休憩する」から派生されている。不定形は *kútámúká* であるが、含まれる派生接尾辞 *-uk-* は固有の声調を持たず、語尾 *-á* の声調をコピーしている。名詞に含まれる *-uk-* も同様で、語尾の *-ó* の声調コピーするのである。

以上は、語根の声調が H なので分かりづらいが、(33) の *ńderékéréro* 9/10 「祭壇」の場合は動詞語根 *-ter-* の声調が L なのでわかりやすい。この名詞は *kúterékérá* 「お供えをする」の適用形 *kúterékérérá* 「～にお供えをする、～でお供えをする」から派生されている。この動詞 *kúterékérérá* は形態論的に *kú-ter-ék-ér-ér-á* と分析できる。これは、前から、クラス 15 の名詞類接頭辞 *kú-*、語根 *-ter-*、形式的拡大辞 *-ek-*<sup>30</sup>、形式的拡大辞 *-er-*、適用の派生接尾辞 *-er-*、そして動詞語尾の *-á* である。形式的拡大辞とは、適用などの派生接尾辞同様、動詞語根に付き形式を拡大するものであるが、派生接尾辞とは異なり特定の意味を持たないものである。しかし多くの派生接尾辞同様、それ自体声調を持た

<sup>30</sup> この *-ek-* は位置的他動の派生接尾辞かもしれない。

ず<sup>31</sup>、不定形では語末の母音の声調をコピーする<sup>32</sup>。そして名詞 *ńderékéréró* 9/10「祭壇」もそれを踏襲するのである。すなわち、*-ék-ér-ér-* の H 声調は語尾 *-ó* の声調をコピーしたものである。(34) の *múǰítondóbóló* 3「人に自分の出自を明らかにすること」も同様である。ただし、この場合は「自らについて」を意味する再帰代名詞 *-ǰi-* が挿入されている。このように、長い名詞類は動詞から派生されている場合が多く、その声調付与は動詞の声調付与に準じるのである。

(31) *mútámó* 疲れ sg.

*mú-tám-ó*

NPr3-be.tired-FV

cf. *kútámá* 疲れる

(32) *mútámúkó* 休憩 sg.

*mú-tám-úk-ó*

NPr3-be.tired-Rev.Intr-FV

cf. *kútámúká* 休憩する

(33) *ńderékéréró* 9/10 祭壇 sg.,pl.

*ń-ter-ek-ér-ér-ó*<sup>33</sup>

NPr9-make.offering-Ext(PosTr)-Ext-Appl-FV

cf. *kúterékérérá* ～にお供えをする、～でお供えをする

(34) *múǰítondóbóló* 3 人に自分の出自を明らかにすること sg.

*mú-ǰi-tond-ób-ól-ó*

NPr3-self-Ext-Tr.-FV

cf. *kúǰítondóbólá* 自らの出自を明らかにする

<sup>31</sup> 使役と受身の派生接尾辞は固有の声調を持っている。

<sup>32</sup> この動詞は *-er-er-* と *-er-* が 2 つ続く。筆者は、前者を形式的拡大辞、そして後者を適用の接尾辞と見るが、二重の適用派生接尾辞と見ることも可能であろう。ここでもポイントは、形式的拡大辞であれ派生接尾辞であれ、これらが声調を持たないことである。

<sup>33</sup> テンボ語には子音の無声と有声の対立はなく、*ńderékéréró* 9/10「祭壇」の有声音 [d] は、/n/ の後で /n/ が有声化したものである。(35) にも /nt/ → [nd] の例が見える。

もう 1 例、(35) に動詞からの派生名詞の例を示す。(19) に出てきた HLHLLH *ndaákápirwá* 9/10 「人が弁護をしてくれない人」である。これには否定のマーカ -ta- (L) と受身の派生接尾辞 -ú- (H) が入っている。-ta- も -ú- も本来は動詞の要素である。それがここでは名詞に含まれている。そして、その声調は動詞に準じるのである。なお、*ndaákápirwá* 9/10 は動詞に即して訳せば、「人が、あの人はそんなことをするような人ではないと否定をしてくれない人」ということになる。Appl は「(人の) ために」を表す。

(35) *ndaákápirwá* 9/10 人が弁護をしてくれない人 sg.,pl.

*n-ta-ʔák-an-ir-ú-á*

NPr9-not-deny-Ext-Appl-Pass-FV

cf. *kúákáná* 否定する

## 7. 基本形とその変化

### 7.1 基底形

テンボ語は他の多くのバンツー系言語とは異なり、単独形の声調が基本となるものである。しかし声調が変化しないかというところではない。変化を起こさせるのは、後続する付加形容詞である。テンボ語の形容詞は、声調の作用に関して2種類ある。前の名詞の最後の H を下げるものと、逆に最後の L を上げるものである。まず、下げるものから見てみよう。

(36) の例は、名詞 *múlumé* 1 「男sg.」に付加形容詞 *múlelelé* 「背の高いsg.」が付いた名詞句である（付加形容詞は名詞に後続する）<sup>34</sup>。「男sg.」は単独で発音すると *múlumé* となるが、そのあとに初頭の声調の高い形容詞 *múlelelé* 「背の高いsg.」が付くと、名詞のパターンが HLH から HLL へと変化する。対応する複数形も同じである。いかなるクラスに属する名詞であれ、またいかなる声調のパターンを持つ名詞であれ、最後が LH で終るならば、H で始まる形容詞の前ではこの変化を起す（梶 1978: 50）。しかしながら、(37) の例

<sup>34</sup> 形容詞も名詞同様、接頭辞と語幹からなる（場合によっては Aug も）。そして形容詞の接頭辞は、それが修飾する名詞のクラスに応じて形を変える。

のように最後のモーラの声調が L のものや、(38) の例のように最後2モーラの声調が H のものは変化しない。こういった逆行異化を起こさせる H の接頭辞を持つ形容詞には、-lelelé「背の高い、長い」以外に (39) のようなものがある（詳しくは梶 1978参照）。

- (36) a. múlumé 1            男 sg.  
           múlume múlelelé 1 背の高い男 sg.  
       b. bálumé 2            男 pl.  
           bálume bálelelé 2 背の高い男 pl.
- (37) a. múkasi 1            女 sg.  
           múkasi múlelelé 1 背の高い女 sg.  
       b. bákasi 2            女 pl.  
           bákasi bálelelé 2 背の高い女 pl.
- (38) a. kálefúlá 12        顎 sg.  
           kálefúlá kálelelé 12 長い顎 sg.  
       b. tʰúlefúlá 13       顎 pl.  
           tʰúlefúlá tsúlelelé 13 長い顎 pl.
- (39) a. -nené 太った  
       b. -ʔeké 小さい、瘦せた  
       c. -kulu 年長の、偉い  
       d. -jajá 新しい、若い  
       e. -bófu 柔らかい

(36) とは逆の逆行異化を起こさせる形容詞には (42) のようなものがある。(40) の例を見ると、L で終わる名詞のあとに接頭辞が L で始まる形容詞が続くと、L で終わる名詞はその最後の L が H となる。(41) のように最後が元々 H のものは変化しない。

- (40) a. múkasi 1 女 sg.  
       múkasí mufu 1 背の低い女 sg.  
       b. bákasi 2 女 pl.  
       bákasí bofu 2 背の低い女 pl.
- (41) a. múlumé 1 男 sg.  
       múlumé mufu 1 背の低い男 sg.  
       b. bálumé 2 男 pl.  
       bálumé bofu 2 背の低い男 pl.
- (42) a. -elú 白い  
       b. -irafulu 黒い  
       c. -ŋgi 多くの  
       d. -bilí 2つの  
       e. -hát<sup>h</sup>ú 3つの

(42) の形容詞は前の名詞の最後の L を H にしたが、その接頭辞の声調が L でありながら (39) と同じく、逆に前の名詞の最後の H を L にする形容詞がある。ただ数は少なく、また種類も限られていて、-ŋgá 「幾つの」以外には (46) の所有形容詞があるのみである。

- (43) bálumé 2 男 pl.  
       bálume baŋgá 2 何人の男 pl.
- (44) bákasi 2 女 pl.  
       bákasi baŋgá 2 何人の女 pl.
- (45) t<sup>h</sup>úlefúlá 13 顎 pl.  
       t<sup>h</sup>úlefúlá t<sup>h</sup>uŋgá 13 幾つの顎 pl.
- (46) a. -apí 私の  
       b. -au あなたの  
       c. -ai 彼(女)の  
       d. -et<sup>h</sup>u 我々の

- e. -epu あなた方の  
f. -abu 彼(女)らの

以上のような声調の変化を考えると、例えば「男」の基底形は *múlumé* 1/2 とすべきか *múlume* 1/2 とすべきか迷うところであろう。しかしこの変化は付加形容詞の後続という統語的条件によってもたらされたものであり、「男」は *múlumé* 1/2 が基本なのである。

## 7.2 両極化

英語で *polarization*「両極化」と呼ばれる現象がある (Hyman & Schuh 1974)。(47) を見てみよう。(47a) の *ndzímba* 10「服 pl.」と (47b) の *ŋkánga* 10「肋骨 pl.」の接頭辞 *n-*、*ŋ-* の声調は L である。これは、それぞれの単数形 *luŋímba* 11 と *lukánga* 11 の接頭辞 *lu-* の声調が L であるから自然な成り行きである<sup>35</sup>。しかし (47c) の *ndéfú* 10「髭 pl.」と (47d) の *ŋgáfí* 10「家の枠組みの木」の接頭辞 *n-* と *ŋ-* も L 声調であるが、それぞれの単数形 *lúréfú* 11 と *lúáfí* 11 を見ると接頭辞 *lú-* は H 声調である。これは「単数形と複数形の声調のパターンは同一」というバンツー諸語の一般原則に反する。そこで接頭辞が N- である例を見ると、すべての語で語幹初頭の声調と接頭辞の声調とが逆になっていることがわかる。語幹初頭の声調が H なら接頭辞の声調は L であるし、逆に語幹初頭の声調が L なら接頭辞の声調は H である。これが両極化と呼ばれるものである。従って、接頭辞が N- である名詞類は、(47e) の *káoko* 12/13「小さいニワトリ」のように、接頭辞が N- でない派生形がない限り、この N- の本来の声調は分からないということになる。ただ、(47i) (47j) のように語幹が 1 モーラの場合は N- の声調は常に H となる。これも語幹が 1 モーラであるという条件のもとでの H であるので、本来の声調は分からない<sup>36</sup>。

<sup>35</sup> Guthrie (1948: 12) は、何がバンツー語であるかの基準を幾つか立てているが、その中に、単数形と複数形の語幹の声調が同じであるという基準を挙げている。しかしこれは語幹だけでなく接頭辞を含めた単語全体についても一般に言えることである。

<sup>36</sup> 一般にバンツー系諸語においては名詞類接頭辞の声調は L で、テンボ語のような声調逆転言語では逆に H が基本なので、この N- の声調もテンボ語では H と見なすのがいいのかもしれない。

- (47) a. luŋĩmba 11, ndzĩmba 10 服  
 b. lukánga 11, ŋkánga 10 肋骨  
 c. lúréfú 11, ndéfú 10 髭  
 d. lúáfí 11, ŋgáfí 10 家の枠組みの木  
 e. ŋgoko 9/10 ニワトリ cf. káoko 12/13 小さいニワトリ  
 f. mbene 9/10 山羊  
 g. ŋgái 9/10 ゴリラ  
 h. mbámbá 9/10 弁当  
 i. ndá 9/10 内部、腹  
 j. n̄zó 9/10 鷺

クラス 9/10 の N- のみならず、クラス 5 の接頭辞 e- にも両極化現象は起きる。ただし、これは語幹初頭の声調が H の場合のみ、接頭辞 e- の声調が L となるというものである (48a) (48b)。語幹初頭の声調が L の場合は、e- の声調も L のまま留まる単語もある (48c)。(48a) (48b) で単数形の接頭辞 e- の声調が L であっても、これは本来 H であることは、その複数形で接頭辞 má- の声調が H であることからわかる。また (48d) (48e) のような例でも、その複数形の接頭辞 má- の声調が H であるため e- は本来 H であるとわかる。また N- の場合同様、(48f) (48g) のように、語幹が 1 モーラの場合は、その接頭辞の声調は L とならず H のまま留まる。

- (48) a. eŋĩndzĩ 5, máŋĩndzĩ 6 ニワトリのしっぽの毛  
 b. erámbó 5, mára mbó 6 動物の水飲み場  
 c. esamba 5 白人であること cf. musamba 1/2 白人  
 d. ébusí 5, mábusí 6 動物のメス  
 e. éfulúkó 5, máfulúkó 6 仕事からの帰宅  
 f. éfí 5, máfí 6 膝  
 g. éhá 5, máhá 6 乾いたバナナの葉

## 8. 声調の機能

声調の機能には語彙的なものと文法的なものがある。一般にバンツ一系の言語で特徴的なのは、その文法的機能である。

### 8.1 声調の語彙的機能

一般にバンツ一系の言語では語彙的機能は高くない。なぜなら、第一に単語が長いので語彙的区別を声調に頼る必要がないということがある。第二に基本的に声調が H と L の 2 つしかないので声調による多様な区別がしにくいということがある。(49) に声調による最小対の例を掲げる。

- (49) a. ndá 9/10      内部、腹  
           nda 9/10      しらみ
- b. éfi 5/6        膝  
           éfi 9/10      魚
- c. njíndó 9/10    ハンマー  
           jindó 9/10    鼻
- d. fífukó 7/8     葉の蓋  
           fífúko 7/8    列状集落
- e. mwêsí 1/2     鍛冶屋  
           mwesí 3/4     月
- f. kúbólá        差別する  
           kúbolá        腐る
- g. kúhóngólólá 先を尖らす  
           kúhóngólólá 液体を澄ます、濾す

### 8.2 声調の文法的機能

テンボ語の声調の文法的機能としては (50) の 3 つを上げることができる。そのうち、(50c) はバンツ一系の他の言語では見かけない特殊なものである。

- (50) a. 時制・アスペクト・ムードの区別  
 b. 関係節の形成  
 c. 呼格

声調は時制・アスペクト・ムードの区別に重要な働きをする。ただし最小対はそう多くはない。テンボ語では (51) のようなものがある。

- (51) a. 現在進行形 náénda 私は行く  
 n-á-ʔénd-a  
 I-TM-go-FV  
 叙述過去形 náénda そして私は行った  
 n-a-ʔénd-a  
 I-TM-go-FV  
 b. 遠過去形 náénda 私はずっと前に行った  
 n-á-ʔénd-aʔ-a  
 I-TM-go-Prefin-FV  
 近過去形 náénda 私は最近行った  
 n-a-ʔénd-aʔ-a  
 I-TM-go-Prefin-FV

関係節の形成にも声調は大きな役割を果たす。動詞の関係節には、動詞接頭辞として代名詞接頭辞 PPr が用いられるのであるが、多くのクラスで、非関係節の(普通の)動詞接頭辞 SPRと音形が同じになる。従って、(52) のような最小対が生じる。(52b) ではこの動詞形が関係節であることを受けて、完了語尾の -ire が -iré となる。

- (52) a. éndzírá ifímire 道は真っすぐである  
 é-n-dzírá i-ʃím-ire  
 Aug-NPr9-road SPR9-be.straight-Perf

b. énjírǎ íjǐmiré 真っすぐな道

é-n-dǐrǎ i-jǐm-iré

Aug-NPr9-road PPr9-be.straight-Perf [SubRel]

呼格とは、人の名前を呼びかけに用いる形式である。7.1 節においてテンボ語の単語は、その最後の声調が HH のものは如何なる音声的環境においても変化しないと述べたが、呼格という文法的環境では変化する(梶 1985)。すなわち、呼格においては、すべての語で最後の H が L となるのである。最後のモーラが L であるものは変化しない。以下 (53) で掲げた名詞は、意味は様々であるが、すべて人名として用いられたものである。

(53) a. lúéndó 11 旅 sg.

lúéndo! ルエンドよ!

b. bálumé 2 男 pl.

bálume! バルメよ!

c. mútóbo 3 バナナジュース sg.

mútóbo! ムトボよ!

d. kalanda 12 小腸の内容物 pl.

kalanda! カランダよ!

## 9. 終わりに

本稿はテンボ語の声調、とりわけそのパターンを見てきた。テンボ語は世界的にも稀な多モーラ語の無制限タイプである<sup>37</sup>。しかしながら、すべての声調が単語の中に無秩序に並んでいるわけではなく、(54) のような制限事項がある。

<sup>37</sup> 似たようなケースは本書所収の他論文でも示されている。しかしながら、米田論文のヘレロ語や品川論文のロンボ語では名詞の接頭辞は基本的に L(あるいは Ø)であり、パターンが等比級数的に増えるのは語幹の部分のみであり、テンボ語ように接頭辞を含めた単語全体ではない。

- (54) a. クラス 2*a* の接頭辞 bá- の声調は常に高い。  
 b. クラス 15 の接頭辞 kú- の声調も常に高い。クラス 15 は動詞の不定形 (=動名詞) のクラスである。  
 c. 動詞からの派生名詞は動詞構成の声調規則に従う。  
 d. クラス 9/10 の接頭辞 N- の声調は両極性を示す。  
 e. クラス 5 の接頭辞 é- の声調も両極性を示す。

(54c) については 6 節、また (54d) (54e) については 7.2 節で述べたので、最後に (54a) (54b) について触れておく。テンボ語はその歴史の中で声調が逆転したので、名詞類接頭辞の多くは声調が H である。L である方がむしろ異常で、こちらの理由を探さなければならない。クラス 2*a* とクラス 15 の接頭辞の声調が常に高いのは、むしろこのことが最もはっきりと出てきていると考えるべきである。本稿中に出てきたクラス 2*a* の名詞を (55) に、そしてクラス 15 の名詞 (=動詞の不定形) を (56) と (57) にまとめて再録する。(56) は語根が H のもの、そして (57) は語根が L のものである。なおクラス 15 には 1 語だけ kúúlú 15/6 「脚」という名詞が入っている (58)。これもその接頭辞の声調は動詞の不定形同様 H である。

- (55) a. bákángóte 2*a* 堅いもの pl.  
 b. bánámugôndo 2*a* 大腸 pl.  
 c. bánádójongdójo 2*a* カッコウの一種 pl.  
 d. bánámbiombío 2*a* キャッサバの一種 pl.  
 e. bánámusenzéli 2*a* トンボ pl.  
 f. bánámásiósió 2*a* ヒタキ pl.
- (56) a. kwáná 忠告する  
 b. kúáná 物語る  
 c. kútámá 疲れる  
 d. kútámúká 休憩する  
 e. kúbólá 差別する

- f. kúhóngólólá 先を尖らす  
 g. kújímá 真っすぐである  
 h. kúéndá 行く  
 (57) a. kútaŋgírísá 始める、始まる  
 b. kwítá 殺す  
 c. kúítá 通る  
 d. kúterékérá お供えをする  
 e. kútondóbólá 出自を明かす  
 f. kúbolá 腐る  
 g. kúhóngólólá 液体を澄ます、濾す  
 (58) kúúlú 15/6 脚

以上、コンゴ東部に話されるバンツー系テンボ語の声調を、そのパターンと機能について考察した。本稿の主眼は声調のパターンにあり、機能については概略しか述べることができなかつたが、それでも、今まであまり知られることのなかつたこの言語の声調の特徴について明らかにすることができたと思う。

## 謝辞

本稿は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された共同研究プロジェクト「アフリカ諸語の声調・アクセントの総合的研究」（2016～2018年度、研究代表者：梶 茂樹）の成果の一部である。研究会の席で、また論文草稿段階でコメントをいただいた方々に感謝を申し上げる。また共同利用共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (2)」の成果の一部でもある。

## 参考文献

- 赤阪賢 (1978) 「テンボ学事始—エスノヒストリーの試み—」『アフリカ研究』17: 113-119.  
 Eberhard, David M., Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2019)

- Ethnologue: Languages of the World*. Twenty-second edition. Dallas, Texas: SIL International.
- Guthrie, Malcolm (1948) *The Classification of the Bantu Languages*. London: International African Institute.
- Hyman, Larry M. and Russell G. Schuh (1974) “Universals of tone rules: evidence from West Africa” *Linguistic Inquiry* 5: 81-115.
- 梶茂樹 (1978) 「Tembo 語の名詞の tone」『アフリカ研究』17: 34-57.
- 梶茂樹 (1982) 「テンボ語音韻論におけるいくつかの問題点—特に子音交替に関連して—」『アジア・アフリカ言語文化研究』24: 62-96.
- 梶茂樹 (1984) 「テンボ族の言語と民話」伊谷純一郎・米山俊直 (編) 『アフリカ文化の研究』 pp.523-543. 京都: アカデア出版.
- 梶茂樹 (1985) 「テンボ族の人名の言語学的特徴」『季刊人類学』16(2): 78-123.
- Kaji, Shigeki (1986) *Lexique Tembo I: Tembo-Swahili du Zaïre-Japonais- Français*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 梶茂樹 (1994) 「テンボ語の声調の逆転現象—フンデ語、バンツー祖語と比較して—」『言語研究』105: 54-86.
- 梶茂樹 (1995) 「テンボ語通時音韻論」『アジア・アフリカ言語文化研究』48-49: 387-418.
- Kaji, Shigeki (1996) “Tone reversal in Tembo (Bantu J.57)” *Journal of African Languages and Linguistics* 17(1): 1-26.
- 梶茂樹 (2001a) 「世界の声調・アクセント言語」『音声研究』5(1): 8-10.
- 梶茂樹 (2001b) 「バンツー諸語の声調—そのタイプ—」『音声研究』5(1): 37-45.
- 梶茂樹 (2001c) 「ハヤ語の母音と声調—『ハヤ語語彙集』に関連して—」『アジア・アフリカ文法研究』29: 181-191.
- Maho, Jouni Filip (2009) NUGL online: the online version of the new updated Guthrie list, a referential classification of the Bantu languages.  
[https://brill.com/fileasset/downloads\\_products/35125\\_Bantu-New-updated-Guthrie-List.pdf](https://brill.com/fileasset/downloads_products/35125_Bantu-New-updated-Guthrie-List.pdf). [Retrieved on October 14, 2020]